

日蓮『注法華經』寿量品における 『法華文句』の注記について

関戸 堯海

『注法華經』は日蓮が所持した『法華經』の余白や裏に、諸經論疏の要文を書き入れたものである。天台三大部をはじめ、最澄・源信などの天台関係からの注記が多く、日蓮が参考としていることがよくわかる(小松邦彰「日蓮撰『注法華經』の一考察」)。一方で、真言宗(空海)・華嚴宗・法相宗・浄土宗などの典籍もみえ、これらの見解を検討したり、反論の準備としてと推察されている。このように、注記の目的は多様であるが、『法華經』の經文の内容と直接関係していると思える場合が多い。ここでは、寿量品に注記される『法華文句』について検討し、注記の要文と經文との関係を再確認したい。

寿量品が収録される『注法華經』巻六の見返しには、法身と応身、毘盧遮那仏と釈迦仏など釈尊の仏身論に関して『法華文句』九の釈寿量品から注記されている(六卷三)〔六卷六〕。山中喜八『定本注法華經』(巻・番号)。各巻の「見返し」の余白を利用して、何かしらのテーマに沿って参考文献を集めるという特徴が、巻六にも示されている。

寿量品では、地涌菩薩の出現(涌出品第十五)に驚いた聴衆を代表して、弥勒菩薩が釈尊に質問するが、釈尊は三たびいしめ、聴衆は三たび説法を懇願する。さらに、重ねて聴衆が懇請し、釈尊は四度目のいしめをする。「四請四誠」の丁寧な

儀式によって、釈尊の説法的重要性を示すのであるが、ここに書き込まれる『法華文句』九(六卷九)〔六卷一〇〕も、「四請四誠」に直接関わるものである。

また「我、実に成仏してより已来、無量無辺百千万億那由他劫なり」と、釈尊が無上の悟りを達成してからこのかた、はかり知れない無限の時間が経過していることが明らかにされる。この經文の近くに書き込まれる『法華文句』九(六卷一三)〔六卷一四〕〔六卷一五〕には「永遠の釈尊」について論じられている。

「如来はもろもろの小法を樂える徳薄垢重の者を見ては、この人のために我わかくして出家し、阿耨多羅三藐三菩提を得たりと説く」とあり、仮の教え(小法)に固執している人々のために、永遠の釈尊であることを説かず、始成正覚を説いてきたことを明らかにする。この經文の付近に注記される『法華文句』九(六卷一六)〔六卷一八〕〔六卷二〇〕は「小法を樂える徳薄垢重の者」について論じている。

「みな実にして虚しからず」と、釈尊が人々の機根に応じて説くさまざまな教えは、すべて真実であって、いつわりではないと説く。この經文の付近の『法華文句』には「虚像のような仮の悟りの世界から、真実に入る」などあり(六卷二九)『法華文句』九、(六卷三二)『法華文句』五・釈譬喩品、この部分の寿量品の内容と関連している。

そして、自我偈の部分には『法華文句』から理と事(六卷四二)『法華文句』十・釈随喜功德品、法身の常住(六卷五〇)『法華文句』六・釈信解品)についての書き込みがあるの

で、これらも経文と密接に関連していることがわかる。

日蓮が寿量品について考えるとき『法華文句』の智顗の見解をおおいに参考としていたことが再確認できた。日蓮が仏教研鑽の成果としての要文集を整理して『法華経』の余白に書き入れたと考えられるが(浅井圓道『上古日本天台本門思想史』、北川前肇『日蓮教学研究』)、書き込みの目的を知ることが容易ではない。注記の要文それぞれについて詳細に検討し、『法華経』の経文の内容と比較することが必要である。近年、『注法華経』に東密・台密関係の典籍の名が多くみえることによつて、日蓮の教義の根底に密教思想が存在していると指摘する意見がある。しかし、空海の著作の例にみられるように、日蓮は反論するための準備として注記する場合も多い。このことに充分留意する必要があるだろう。

山川智応の浄土教批判

前川 健 一

近代において田中智学を中心とする国柱会の日蓮主義は、単に日蓮解釈や日蓮系宗教のみでなく、社会全体に大きな影響を与えた。研究史的にも着実な蓄積がなされてきてはいるが、それらはおおむね社会思想的な関心に偏っているように思われる。田中智学のそもそもの出発点が、当時の日蓮宗で重視されていた優陀那日輝の教学への反発であり、国柱会の活動の基本が日蓮教学の刷新とその伝道にあったことを考えると、田中な

いし国柱会のトータルな理解のためには、彼等の教学的達成それ自体を検討する必要があると思われる。

田中は、大正時代以後は国体思想に主軸を移したと一般に言われるが、この時期以後、日蓮教学の面を主として担うのが、山川智応をはじめとする田中の直弟子たちであり、さらには田中の実子である里見岸雄らであると言える。田中は『本化妙宗式目』及び、その講義という形で、独自の日蓮教学の編成を行ったが、田中の場合、用語の面でも発想の面でも、近世的な日蓮教学の枠組みに強く規制されている。それに対して、少なくとも本人の意図としては、より開かれた形で日蓮を語ろうとしたのが、山川であり、日蓮教学の近代化という点でも重要な位置に立っていると思われる。

山川智応(一八七九—一九五六)は、大正五年(一九一六)、『日蓮聖人と親鸞』(新潮社)を、大正十二年(一九二三)、『日蓮聖人と法然』(天業民報社)を出版した。山川の諸著の特徴は、日蓮の浄土教批判自体を發展させるというよりも、日蓮の生涯・教義体系などと、親鸞・法然のそれとを比較することで、日蓮を高く評価するという方法を採用していることである。山川は事蹟・人格・教義という三項目を立てて比較をしているが、ここで重要なのは、事蹟・人格の比較に大きなウェイトが置かれていることである。各宗の価値を開祖の人格に集約し、比較を行うという方法は、結果として、大乘非仏説論をめぐる問題を回避することになっている。山川自身は明言していないが、日蓮自身から始まり、近世にいたるまでの、日蓮宗と浄土宗諸派との間の大きな争点が、浄土三部経と『法華経』と